

# 道心と恋との物語

——宇治十帖の一方法——

鴨野文子

「源氏物語」宇治十帖に於る、いわゆる大君物語—薫と大君との物語—と呼ばれる部分については、大きく分けて二つの見方がとられているようである。一方は、薫の側から光を当てることによつて、その道心の停滞と頽廢の過程をそこに見るものであり、又、今一方は大君の側からの照射により、結婚拒否の倫理の遂行の跡を見出すものである。<sup>註1</sup>

薫と大君とが、そのように各々独自の問題を担つて登場させられることは確かであつても、各々が一つの「關係」を形作ることによつてのみ物語が展開されているという自明の事からを忘れてはならない。ここでの試論の視点は、まず「關係」という物語そのものの構図に目を向けることにある。限りなく近づきながら、しかも永遠に結び合うことのない、世にもあやにくな物語の構図を具象化し領導するのは、他ならぬ宇治十帖をめぐつての二筋の糸、「道心」と「恋」とが相携えて一本の繩を綯うという方法な

のではないだろうか。「恋」と「道心」という背反する二つのものの関わり方から、私は今物語の複雑さを（大君物語に関して）読み解こうとしている。

—

薫は、出生をめぐつての「おぼつかなさ」の中に道心を育み、阿闍梨の仲介によつて法の友（或いは師）八宮を得たのであつた。それ故、宇治の姫君達への青年らしい興味も、自ら「さる方を思ひ離るる願に、山深く尋ね聞えたる本意なく、すぎずきしきなほざりごとをうち出で、あざればまむも、こと違ひてや、など思ひ返して：（橋姫<sup>註2</sup> p 221）」と打消され、三年の月日が道の交わりの中に流れ去つている。そのような薫が、恋物語の主人公としての道を歩み始めたのはいつのことだつたらう。出生の秘密「道心」をめぐつての「おぼつかなさ」から「恋」をめぐつてのそれへ、

「おぼつかなさ」の質の転換点を見定めておく必要がある。

入りもて行くままに、霧りふたがりて、道も見えぬ繁き野中をわけ給ふに、いと荒ましき風のきほひに、ほろほると落ちみだるる木の葉の露の散りかかるも、いと冷やかに、人やりならずいたく濡れ給ひぬ。  
(橋姫 四 p 223)

もの淋しい晩秋の一日、辺り一面霧が立ちこめる。繁き野中を、薫はただ一人宇治へ歩を進める。山と川に囲まれた「宇治」という自然状況の故におのずから場面に引き出される「霧」は、ここで薫の心象そのものを二重写しにするかのようである。出生をめぐつてのいぶかしさから、すがることのできる何ものか―仏道―を求めて、八宮の許へ急ぎながらも、胸一杯に広がるおぼつかなさは立ちこめる霧そのものだ。

ここでの流れる霧が、単なる自然の背景としてではなく、薫の心象を担い持つものとして現わされたものであることは、「霧」がこの道行に始まる一連の場面にまつわつて、極めて意識的に使われていることから逆にも確認することができる。山荘に辿りついた薫は、折からの四季の念仏の為の八宮不在に、「月をかしましきほどに霧り渡れるをながめて、簾を短く巻き上げ」た女房達の奥にはじめて姫君達を垣間見たのだつた。「霧の深ければ、さやかに見ゆべく」もないが、つかの間浮び上つた姉妹の月をまねく撥

をめぐつての戯れは、げにあはれなるものの隈ありぬべき世なりけり」と、薫に吐息をつかせる。流れる霧の深さの中でみた類いなく美しく儂い夢にも似た姫君達の姿は、印象深く彼の心に刻まれた。それ故、

まだ霧のまぎれなれば、ありつる御簾の前に歩み出でて、ついでに居給ふ  
(橋姫 四 p 227)

と、やがて薫は、姫君達の御簾の前にひざまずき、懸想人さながらの姿をさらすことになる。薫のことば、「かつ知りながら、憂きを知らず顔なるも、世のさかと思ふ給へ知るる、一所しも、あまりおぼめかせ給へらむこそ、口惜しかるべけれ」とは、あたかも懸想人のそれだ。

恋の物語がようやく描かれたとみえる時、物語は意外な方向に転じる。応対の為に物語に引き出された老女房、弁―柏木の乳母子であつた―の問はず語りが、薫にその出生の秘密を明すことになるのだ。わななきながらも、「あはれなる昔の御物語」を聞かすべき折を長い間祈り待っていたのだと語り出す弁の話のあやしき、ゆかしさに、薫は自らのいぶかしさ、おぼつかなさを残るところなく晴らしたいと願う。人目をはばかりてそれも適わず、やがて座を立つ時、物語には次の一文が来ている。

かのおはし主の鏡の声、かすかに聞えて、霧いと深くたち渡

れり。

(橋姫 田 p 232)

何かが僅かに分つてきたようだ。その時、おはします寺の鐘の聲は、仄かに響く。けれども、再びそれを覆うかのように霧は深々と立ちこめる。薫のおぼつかなきは、ほんの少し晴れたかのようにもみえて、実はなお深い霧の中に閉ざされたのだ。だから薫は歌を詠む。

あさばらけ家路も見えずたづねこし櫛の尾山はきりこめてけり  
(橋姫 田 p 232)

と。

いぶせかりし霧のまよひという風に、後になって回想される一連の場面は、姫君の垣間見と、弁の問わず語りによる出生の秘密の解明とが重なることによつて、実は一つの大きな物語の転換点となつており、場面に流れる霧こそはその転換に重く関わるイメージを担つてここに機能している。云つてみれば、霧は二重の意味を帯びて、ここに深い。一つは、むろん出生の秘密をめぐつて胸に湧き上るおぼつかなきを意味するものであり、それはおのずから求道の思いを導くものとして捉えうる。そのおぼつかなきを胸に、八宮の許を訪れ、弁の物語によつてそのおぼつかなきが晴らされるかにみえた時、寺の鐘の響きがしんと胸を打つ。道心とそれとの関わり方を、その辺りに窺うことも可能だろう。

一方のおぼつかなきは、姫君をめぐつての恋に関わつている。道心の深まりを求めていた筈の薫の八宮訪問に、霧流れる夜半の姫君垣間見は、思いよらぬかたちで関わつてきた。漂う霧さながら、姫君へのゆかしさ、おぼつかなきに薫の心はひたひたと充たされる。道心を担う彼にとつての恋の出会いとは、その生のおぼつかなき、不安を一層かき立てるものに他ならなかつた。

弁の物語に、その幼い日から抱き続けてきた一つの問題の仄かな解決のきざしをみた時、薫には既に別のかたちでのおぼつかなきが担わされていたとみることができる。弁のこの物語をきつかけに、やがて柏木の文殻さえ手渡され出生の秘密が残りなく晴らされる時、いかなる事と、いぶせく思ひ渡りし年頃よりも、心苦しうて過ぎ給ひけむいにしへさまの思ひやらるるに、罪軽くなり給ふばかり、行もせまほしくなむ。(椎本 田 p 255) と、以前よりもその道心の深まつたことが記されようとも、もはや新たな筋の動的展開を導くエネルギーを失なう。おぼつかなきこそが、新たな物語を紡ぎ出す原動力である。新しいおぼつかなきは、他ならぬ弁との邂逅に重なる垣間見を通して準備され、据えられた。そして、道心を担う人物なるが故の、おぼつかなきと捉えられる恋のあやにくな意味をこそ、

かのおはします寺の鐘の聲、かすかに聞えて、霧いと深くた

ち渡れり。

というかたちで、物語は現わすのであつた。

姫君の面影が心に宿つたことが確かに記されながらも、一方で弁の物語への心掛りが述べられる時、薫の中での恋の位置は、同時にやや曖昧なものとなる。その文脈の隙間に、匂宮に宇治の姫君のことを語つてやきもきさせる例の挿話が入りこむことによつて、匂宮をも巻きこんでの宇治をめぐる恋物語の展開は必然化されたと、一方補足的につけ加えておくことができるだろう。

物語は螺旋状に進む。出生の秘密をめぐる恋物語が、薫の心にわたかまり、それが道心を一層高揚させていることを、弁の君を場面に引き出すことによつて語りながら（椎本因 p 255・259・272 など）、同時に表むき、残多かる物語が関心の対象であるが故の、世の常の懸想びてはあらぬ姫君たちとの交渉の深まりが綴られていく。八宮の後見を託す遺言とも相俟つて、薫は彼女らを「領じたる心地」になつていくのだつた。恋の糸がそのようなかたちで延長され、雪を冒しての年の暮の訪問で、大君に対し、匂君の求婚に託しての薫の屈折した恋の告白がはじめてなされる時、もはや例の物語は用済みになる。総角の巻に大君への恋の物語が堰をきつたように語られ始める時、弁が物語の場面に加担するのは、もはや後見役の女房として、大君を薫に結びつけよ

うとすることに於てなのであつた。

(二)

薫は道心を求めての旅からゆくりなく恋にめぐり合つた。恋は、むろん男君の側からまず説き起されるという物語の定法に、薫の恋といえども則つてはいるのだ。物語に記される薫は、めぐり会つた姫君を見つめ、続けている。薫に関して、二度の姫君垣間見は、物語に置かれた後に、はじめて恋物語が具象化されるという方法は、特徴的である。物語は、やはりあの野分の巻に於る夕霧と同性に、「目の人」、認識者として薫という人物を設定しようとしていると述べることは許されよう。……を憎くおしはからるるを、げにあはれなるものの隈ありぬべき世なりけり、と、心移りぬべし。霧の深ければ、さやかに見ゆべくもあらず（橋姫因 p 226）など、第一回の垣間見をめぐるも既に、薫に関する敬語の消失は目立つが、二回目垣間見に於ても、一まず目に入つた中君のはなやかな美貌が、「濃き鈍色のひとへに、萱草の袴のもてはやしたる、なかなかさまかはりて……」（椎本因 p 286）と薫を通して読者の前に引き据えられるが故に、「にほひやかに、やはらかに、おほどきたるけはひ、女一宮も、かうぎまにぞおはすべき、と、ほの見奉りしも思ひ比べられて、うち歎かる」と、敬語

表現は消失してしまつてゐるのである。やがてゐざり出る大君の、僅かに翳を帯びたなまめかしきをも、他ならぬ薫の目が大写しにする故に、……これはなつかしうなまめきて、あはれげに、心ぐるしう覚ゆと物語は表現するのだ。わが恋をめぐつてさえも、かやうにこのみは、え過しはつまじ、と思ひなり給ふも、いとうちつけなる心かな。なほ移りぬべき世なりけり（椎本田 p 278）といつた感懐を、いつも一步離れたところから、自分自身ももう一人の自分を見つめるように抱き続けるというあり方とも合せて、薫は、「目の人」として物語を生きることが動かし難い。

そのような「目の人」として在る薫の側から、大君は照らし出され、徐々にその姿を露わにしてくる。ところが、読者の前に大君の姿が露われ大写しになつた時、既にその心情の内面は薫には窺い知ることのできないものとして象られていた。結婚拒否の倫理という孤絶した觀念をひたすら暖める大君の内面に、語り手は無遠慮に侵入していく。その限りで、作者の問題が、結婚をめぐつての女性の側の不信というところにあつたことも確かだろう。ところが一方、薫が「目の人」であり続けるが故に、彼はそういう大君の拒否があるがままに受入るほかすべもなく、二人の男と女とは永遠に結び合うことがない。問題はむしろ、そのような人間関係のただ中にこそ在するのだ。

この世にもあやにくな、不可思議な恋の物語の展開を可能ならしめてゐるものが、仏道との関わりなのではないかと考えられそう。出生の秘密にまつわるおぼつかなきが、霧のまぎれの垣間見を機に、恋をめぐつてのそれへ螺旋状に変化していくことは認められても、或いは又、屈折したかたちでの姫君と薫との仲介の役を果たした法の友八宮の死を物語に迎えても、仏道との関わりは、それで終わつたのではあくまでない。それどころか恋物語が進められていく、その場面場面に実はぬきさしならぬかたちで、仏道が絡み合つてゐることを知らされる時、薫に於る道心の問題とは、むしろそういう恋物語のただ中におかれることにこそ意味があるのではないかと考えられてくるのだ。以下、総角の巻を辿ることにしたい。

あまた年、耳馴れ給ひにし川風も、この秋はいとはしたなくもの悲しくて、御はての事いそがせ給ふ。大方のあるべかしき事どもは、中納言殿、阿闍梨などぞ仕うまつり給ひける。ここには法服の事、経のかざり、こまかなる御あつかひを、人のきこゆるに従ひて営み給ふも、いとものはかなくあはれに、かかるよその御後見なからましかば、と見えたり。

（総角内 p 15）

場面は、八宮一周忌の準備が進められる秋に据えられた。薫の

様々な配慮の下で法事は着々と準備されていく。その時、姫君たちの許でのものはかなげな細々とした用意は、名香の絲ひきみだりて、「かくても経ぬる」など、うちかたらひ給ふ程なりけり、と具象化され、仏に奉る香の包みに結かける糸の「乱れ」に、語り合う二人の姫君たちの父の死によつてもたらされた悲しみ故の心の乱れが、重ね呼び起されるのであつた。

一周忌の仏事が持ち出され、それ故に仏教的語彙の中から紡ぎ出されるのは、姫君たちの心情ばかりではない。

○結びあげたるたたりの、簾のつまより、几帳のほころびに透き見えければ、その事と心得て、「わが涙をば玉にぬかなむ」とうち誦し給へる、伊勢の御もかうこそはありけめ、と、をかしくきこゆるも、内の人は、聞き知り顔に、さし答へ給はむも、つつましくて、……（総角内 p 15~16）

○御願文つくり、経仏供養せらるべき心ばへなど、書き出で給へる硯のついでに、客人、

あげまきに長きちぎりをむすびこめおなじ所によりもあはなむ  
と書きて見せ奉り給へれば、例の、と、うるさけれど、ぬきもあへずもろき涙の玉のをに長きちぎりをいかがむすばむ  
（総角内 p 16）

仄かに透けて見えた、結びあげたるたたり、を、名香の糸を作るのだと心得る薫故に、「わが涙をば……」という伊勢の歌に託しての心情表現は導びかれる。その時、御簾の中の姫君たちが、故言、古歌こそが、心を晴らす便りであつたと思いを潜めることによつて、薫の心情と結び合つた故、催馬楽「あげまき」を踏えての薫の思いは引き出されることになるのであつた。「あげまき」とは、一方で、総角結び、つまりこの部分では名香の糸の結び方をさすことばである。それ故、追善供養の文章起稿のついでに、薫は「あげまき」に託しての呼びかけを試みるのである。薫の心情も又、姫君たちのそれと同様、仏教的語彙を通してその表現のきつかけをつかみ、そしてそれが更に恋の場面へと繋がれていく。総角の巻の開始に当つて、作者が八宮一周忌の準備の日々という舞台設定をなし、否応なしに仏教的色彩を持ち込んだことは興味深い。そういうものを背景にしたところでの恋であり、又、そういうものを背景にしたところでなければ存在し得ぬ恋であつた。

今宵はとまり給ひて、物語などのどやかにきこえまほしくて、やすらひくらし給ひて、あぎやかならず、物うらみがちなる御けしき、やうやうわりなくなりゆけば、わづらはしくて、うちとけてきこえ給はむ事も、いよいよ苦しけれど、おほかたにてはあり難くあはれなる人の御心なれば、こよなくも

てなし難くて対面し給ふ。仏のおはする中の戸を開けて、みあかしの火けぎやかにかけさせて、すだれに屏風を添へてぞおはする。  
(総角内 p 22)

やがて、仏教的語彙の中から、姫君たち、そして薫の心情が紡ぎ出されるという構図が、薫の仏教的傾斜に意識的に対応せられたものであることが、徐々に明らかにされてくる。その晩、薫は宇治に泊つた。物語などのどやかにきこえまほしく思う故である。対する大君は、しかし、彼の恋心を薄々感じとつて心迷いつつも、様々の薫の精神的物質的好意を「あはれ」と思う心から、その対面を拒むことができない。その時、彼女は、仏のおはする中の戸をあげ、みあかしの火をけぎやかに明るく掲げさせる。椎本の巻の、宮のおはせし西の廂に、宿直人召し出でておはす。そなたの母屋の仏の御前に、君達ものし給ひけるを、け近からじ、とて、わが御方にわたり給ふ御けはひ……(椎本因 p 285) などの記事からも明らかのように、仏間の東隣が姫君達の居間になつて<sup>註4</sup>いるらしい。そういう宇治の山荘という特殊な背景の故に、彼女の行為は可能だったのであり、同時に、宗教的人間である八宮の膝下に育つた、しかも心深い姫君なるが故に、その行為は必然化されるのもあつた。

うちとくべくもあらぬものから、なつかしげに愛敬づきて、

物のたまへるさまのなめならず心に入りて、思ひ焦らるるものはかなし。  
(総角内 p 23)

薫と、大君と。物語りするその場面には、侍女達さえ遠く、ただみあかしの火ばかりがげぎやかだ。その灯の下で、大君のもの云う気配に薫は思いを焦がす。思ひ焦らるるものはかなしとは、語り手のことばなのだろうか、それとも薫その人の内省とみるべきものなのだろうか。心に入りて、思ひ焦らるるもという風に、敬語表現の含まれぬことから、一文は一種曖昧な響きを持ち始める。客観的な語り手の批評そのものであるよりは、薫の独白を語り手がそのまま口移したとでも云うべきあり方だろう。先程から述べてきた仏教的語彙、仏道との関わり方の問題が、恐らくここで顧みられるべきだろう。<sup>註5</sup> 仏のおはする中の戸はうち開かれ、みあかしの火はげぎやかだ。そういうみあかしの輝きの下で女君とうち語らい、我れ知らず募る思いを抱きしめ対座している。薫の仏教的傾斜がこの時こそ意味を持つてこよう。仏を求め、信仰を求めていたはずのその身が、他ならぬ仏の御あかしの前でどうしようもなく高まつてゆく恋情を見つめる、そういう時、はかなしという以外のことばが、薫の内省としてあり得ようか。文脈の上からそれを読み解いていくと、そのような読み方以外に、はかなしを説明するすべはないように思う。

仏道と、恋と、その狭間に洩らされる吐息が、はかなしやで  
るとしたら、その場合これは宇治十帖の世界そのものに、かなり  
根深く結びついたことばだと云うことができる。道心故に、恋を  
はかなしと内省する者の「恋」が、なおそれでいながらめん  
めんと書き続けられていく、「源氏物語」宇治十帖の世界に於る  
仏道とは、その問題のただ中にこそ存在し得るのであつた。

内には、人を近くなどのたまひおきつれど、さしももて離れ  
給はざらなむ、と思ふべかめれば、いとしもまもりきこえず、  
さし退きつつ、みな寄りふして、仏の御ともしびもかかぐる  
人もなし。ものむつかしくて、しのびて人めせどおどろかず。

(総角内 P 32)

夜は更けていく。侍女達は皆、薫の恋に好意的なのだ。さし  
ももて離れ給はざらなむと、女主人公の意向をよそに、眠つて  
しまつたらしい。今は仏のともしびすら掲げる者としてなく、頼り  
のその灯さえ危い。奥に入つてしまおうとする気配をみて薫は姫  
君を捉える。へだてなきとは、かかるをやいふらむ、憂わし  
くたしなめる大君に、薫はその美しい髪をかきやりながらも、仏  
の御前にて誓言も立て侍らむ。御心は決して破りませんよと  
語りかける。更に、薫はその意中を訴え続けるのだが、

御かたはらなるみじかき几帳を、仏の御方にさしへだてて、

かりそめに添ひふし給へり。名香のいとかうばしくにはひて、  
しきみのいとはなやかに薫れるけはひも、人よりはけに、仏  
をも思ひきこえ給へる御心にて、わづらはしく、すみぞめの  
今さらに、をりふし心いられたるやうに、あはあはしく、  
思ひそめしに違ふべければ、かかる忌なからむ程に、この御  
心にも、さりともしきこしたわみ給ひなむ、など、せめてのど  
やかに思ひなし給ふ。

(総角内 P 26)

という風に、一夜は明けていく。仏間を背に、仄かなみあかし  
の火影に、男と女との恋の典型的な語らいの場が設定されたこと  
は、そうでなくては展開し得ない二人の特殊な関係のあり方を物  
語ると同時に、結局こうした結果のもたらされることを意味し  
ていた。名香の芳しさ、しきみのはなやかな香りさえ辺りに充ち  
る中に、人よりはけに、仏をも思ひきこえ給へる御心の薫が、  
自身の情念を貫くことを許されようはずがあるか。それどころ  
か、辺りに漂うその香から、大君の黒染の衣服さえ気にかかつて  
くる。内省は、又もや心に広がり出し、この御心にも、さりと  
もすこしたわみ給ひなむ。時もあるかと、思ひなれて薫は心  
淋しくいきなむのである。

その時、物語には、秋の夜のけはひは、かからぬ所だに、お  
のづからあはれ多かるを、まして峰のあらしも籬の蟲も、心物げ



にのみ聞きわたさるゝと記される。それは、薫の心を一時吹きぬけていつた秋風の音だ。一方の大君は、宮ののたまひしさま、即ち遺戒のことなど思い起すにつけ、疎ましき悲しさは募り、各々の感懐の中に、二人はやがて暁を迎えるのではあつた。

いつたい薫の如き権門の青年にとつて、世にかずまへられ給はぬ。古宮の娘とは何だつただらうか。世間並の物さしで測れば、そういう結婚は、官位昇進のひきにもならぬ、経済的な助けにもならぬ、重荷という他はない、薫の心の尺度は、明らかにそういう世間並の物さしを越えている<sup>註6</sup>という。その物さしを越えた独特のあり方なればこそ、薫は、宮の許は給うこと、という風に、落ちぶれた八宮の許しを重んじたのだし、大君の心に添うべくのだやかに待つたのであつた。その独特なあり方、特殊なあり方を、物語の中で必然的に具象化するのが、他ならぬ仏道との関わりなのであつた。仏間のほの暗いみあかしの下で、男が女の髪をかきやりつつ、語らうという場面は、それ自体宇治十帖の世界の発掘した極めて危い独自の美に妖しく輝いてると云う他はない。永遠に結び合うことのないその関係は、そういう場面のただ中に形象化され、息吹きを与えられたのであつた。

吉岡曠氏が、大君の結婚拒否の決意のきつかけとなつたものを、仏のみあかしの前での一夜に指摘されるのは示唆的である。大君

が拒否を固める一方で、様々な動きが導びかれ、物語が複雑に絡み合つたちぐはぐな世界へと導びかれるのは、まさしくこの一夜をきつかけとしている。一夜の恋の不成立を見てとつた侍女達の強硬手段―姉妹の室に薫を導びく―の失敗は、大君のつきにとつた逃避行の故に、中君にも薫にも、不信と誤解とを与えてしまふ。薫の、匂宮を中君の相手として宇治へ導き入れる行為は、かくして必然化された。……各々の心情は、全く別の方向に現実<sup>に</sup>動き出し、決定的に齟齬する物語が、極めて緻密に構築されようとしている。仏間を背にした、それ故の危い恋の場面の緊張と、そのことからくる結婚の不成立が、直接に、かかる事態を順々に紡ぎ出すことになる。その意味でも、まことに仏教的要素、仏教的語彙は、きわめてアイロニカルに物語の中にとりこまれていとみななければなるまい、ということをつけ加えておこう。

(三)

ところで、仏のみあかしを背景にしての、薫と大君との対面の翌朝、つまり一種の後朝の場面に、鐘の音がしじまを破つて置かれていることに私達は気付かされる。薫と大君をめぐつての一種の「後朝」の場に、鐘の音が響くのは、この箇所を含めて二箇所ある。いわゆる後朝の場に、鐘の音が興を添えるという

あり方が、物語の他の部分には見出すことができないものである以上、これはかなり独自なものだと云わねばならない。

鐘の声、或いは鐘の音、鐘などの語は、大成索引篇によると、正篇には僅か三例しか見出すことができない語であり、しかもそれらは歌の技巧に用いられたり（未摘花（P 349）、或いは明石邸の淋しい趣きのある立地状況を語るのに用いられたり（明石（P 189）、又落葉宮の小野の山荘の様子を写す一文に使われたり（夕霧因 P 22）して、場面によつて任意に用いられ、一つの情趣をそこに添える語という以上のものではないものと考えられる。宇治十帖の状況は、それとは自ら異なるところにある。用いられる七例は、すべて宇治の寺、つまり宇治の阿闍梨の寺の鐘の音に関わっている。物語に根源的に結びついた一つのイメージをそこに予想することは恐らく不可能ではあるまい。中君が、その孤愁に耐えかね、薫に宇治への同行を望む時、彼女の宇治への憧れが、かの近き寺の鐘の声も聞き渡さまほしく覚え侍る（宿木 P 152）と表現されていることは、阿闍梨の寺の鐘の響きがいかに根強く中君にとつての宇治そのもののイメージと結びついていくかということ物語る。というよりは、そのように深く宇治の世界そのものに結びつくものとして、鐘の声のイメージが形象されていると云つた方が良い。或いは、霧の深さの中で薫の

耳に響く鐘の音の意味については、(+)で既に述べた。又、入水を前にしての浮舟の耳に鐘の音が響くという場面（浮舟（P 88）も、物語は設定している。阿闍梨の寺の鐘の響きが場面に加えられることによつて、特有の精神的世界の存在が一方に具象化され、その響きを聞く側の人物の心情が対比的に浮彫りされるといふ構図は、それらの例から明らかだ。

長々と廻り道をしたようだが、仏のみあかしを背景にしての、薫の大君への第一回接近の翌朝の場面に立ち戻ろう。

明くなりゆき、むら鳥の立ちさまよふ羽風近うきこゆ。夜深き朝の鐘の音かすかにひびく。「今だに。いと見ぐるしきを」と、いとわりなくはづかしげにおぼしたり。「ことあり顔に朝霧もえ分け侍るまじ。また、人はいかがおしはかりきゆべき。例のやうになだらかにもてなさせ給ひて、ただ世に違ひたる事にて、今より後もただかやうにしなさせ給ひてよ。よにうしろめたき心はあらじとおぼせ。かばかりあながちなる心の程も、あはれるおぼし知らぬこそかひなけれ」とて、出で給はむの気色もなし。（総角 P 27）

前節で述べてきた場面にちょうど繋がる部分である。共々別の思いを胸にしなから、夜ははかなく明けたのだつた。供の人々の声や、馬の朝のいななきさえも、薫の耳にはもの珍しい。暁の空を、

二人は共に仰ぐ。しのぶの露もやうやの光見えもて行く。あはれさに、何とすることはなしに、かやうに月をも花をも、共にながめて語らい、心を慰め合いたいのだと薫はしみじみと語る。大君もようやく、心なごみ、一時二人の心はそれでも通うかにみえる。その時、時の移ろいが確かめられる。空は次第に明るくなり、その中に、むら鳥の立ちさまよふ羽風が耳近く聞えるのであつた。一日の朝を迎える一瞬の、暁そのものの底から湧き上る仄かな音の力強さが、むら鳥の立ちさまよふ羽風に息づいている。

その時、夜深き朝の鐘の音が仄かに響いてくるのだつた。それは、現実の時を告げ知らせるものでもあつたらう。だからこそ、大君は今だに、お帰り下さいと促し、一方薫はそれに対して、ことあり顔に朝露もえ分け侍るまじと、悠然と構えるのだ。けれども、鐘の音をそれだけのものとして片付けることは恐らくできまい。匂宮と中君とが迎える朝には、鐘の音は響かず、大君が薫との直接の対面を避け得、物越しのそれに終始した場合は、やはり鐘の声は朝を告げることがない。とすれば、ここでの鐘の音は、何らかの意識的な効果を担うものと捉えることができるのではないだろうか。

おおよそ、鐘の音がその耳に響いた時の、二人のことばのやり

とりの特殊性は顧みられるべきである。平安朝にあつては、きわめて異常と云つてよいほどに近しく出会いながら、しかも結ばれずに終るといふその特殊な関係と、鐘の音とはここに密接な関わりをもつことがおさえられてくる。鐘の音が取りこまれ、場面にその音を響かせることによつて、はじめて二人の間には、時をめぐつての別れのことばがかううじて通わされ、場面は収束する。しかも、この鐘の音は、先に述べたように、一貫して宇治の阿闍梨の寺のそれであることによつて、一つの精神的世界の存在を、場面の背後に浮び上らせるものではあつた。そのような鐘の音によつて場面が収束されるのは、きわめて暗示的である。仏教的要素に加担されることによつてのみ、決して結ばれることのない男と女との関係は、その極限状況を刻まれることができたのだと述べる事が許されよう。

そのような鐘の音の仏教的な意味は、薫の第二回接近の翌朝の場面に於て、よりはつきりしたかたちに現われてくる。

「さらば、へだてながらもきこえさせむ。ひたぶるになうち棄てさせ給ひそ」とて、ゆるし奉り給へれば、這ひ入りて、さすがに入りも果て給はぬを、いとあはれと思ひて、「かばかりの御けはひをなぐさめにて明し侍らむ。やめやめ」ときこえて、うちもまどろまず。いとどしき水の音に目もさめて、

夜半のあらしに、山鳥の心地してあかしかね給ふ。例の、明け行くけはひに、鐘の声なきこゆ。いぎたなくて出で給ふべきけしきもなきよ、と、心やましく、声づくり給ふも、げにあやしきわざなり。

「しるべせしわれやかへりて惑ふべきところもゆかぬあけぐれの道

かかる例、世にありけむや」とのたまへば

かたがたにくらすところを思ひやれ人やりならぬ道にまどはば  
(総角 P 51)

これより先、侍女達の計略で姉妹の室に送りこまれた薫は、そこにただ一人取り残された中君を見出した。もの音に思わずとつた大君の咄嗟の逃避行とも知らず、身をわけてなど、ゆづり給ふけしきは度々見えしかど、うけひかぬにわびて構へ給へるなめり(総角 P 43)と、それを意図的なものと受けとつた為、薫の恨みと憤りとは根深い。をこがましき身の上、人わらへと、薫はその体面をさえ恥じ、やがてその思いが、匂宮を中君に結びつけようとする行為を導き出すのであつた。

彼岸の果ての良き日を選んで、薫は匂宮をいみじくしのびて、宇治へ導く。事情の分らぬ弁にその手引を依頼しておいて、薫は自らの意中の人の許に赴く。大君は大君で、薫の訪れを、妹の方

思ひ移つたのだと受けとめる故に、障子を固く閉ざしつても、対面の機会を待つ。薫はその時、かばかりも出で給へるに、障子の中より御袖をとらへて、引きよせて、いみじく恨み訴える。大君の側の、中君を他人と思ひわき給ふまじきさまに、かすめつつ、よろしく頼むと語ろうとするその僅かな隙に乗じたかたちで、薫の第二回目の接近は必然化された。なんとかして、中君の許へ、こしらへ入れむとする大君の様子のおしさに、弁が匂宮を既に導き入れたとおぼしき頃、薫は終に事情を明す。大君の怒りと悲しみとは、先の逃避行が必ずしも意図的なものでなかつただけに、薫の予想を遙かに越えていたましく深かつた。かくよろづにめづらかなりける御心の程も知らずにいた、そんな幼稚さを悔られてのことでしょうかと、大君は恨みこの御障子のかためばかりいと強きも、まことに物清くおしはかりきこゆる人も侍らじなど強引に迫る薫を、心地もさらにかきくらすやうで辛いと、道理を説いてなだめたあげく避けて這い入ろうとする。かくばかり近づき大君とて、さすがに入りも果て給はぬ状態になりながら、二人は結ばれない。大君の決意の固さを、或いは薫の心ののどやかさを云々することはたやすい。問題は、しかしながら、そのような危い関係が如何ように現実化され、必然化されているかというところにあろう。

薫が、大君の逃避を意図的なものと見なしたという錯誤の上の心理の空転が、それを必然化すると云うべきだろうか。と同時になお空しく明けた空に、鐘の聲が響いてくる、そのイメージの使い方に今一度注目せねばなるまい。例の、明け行くけはひに、鐘の声などきこゆと、仏のみあかしの下での対面の翌朝と同じように、二人共々に迎えた暁には、鐘の音が響きわたる。その時、薫は詠む、しるべせしわれやかへりて感ふべきころもゆかぬあけぐれの道と。句宮の恋の案内役しるべであつた自分が、かえつてままならぬわが恋に心惑うのだ。辿り帰る夜明けの道の小暗さそのものように薫の心は淋しく閉ざされている。

薫の歌の暗澹たる色調は何故であろうか。単に、恋のままならぬことを歎く歌であると云うよりは、この歌が何故にか恋する人と結ばれ得ない自分の魂のあり方そのものを、ひたと見据えているかのようにみえるのは、惑ふとかあけぐれの道とかいふ言葉のもつ深い暗さの故であろう。鐘の聲から、まさしくそのような歌が引き出されていることは興味深い。云いかえれば、独特な朝の別れの心情は、鐘の聲をとりこむことによつて、物語に引き出され得たのだつた。そして、その仏教的イメージの故に、薫の心の道心と絡んだところでの複雑な暗澹は描かれ得るのでもあつた。

決して結ばれてはならぬという物語の文脈の規定の中で、きわめて危い恋の接近の場面が成立し、しかも収束するためには、そういう仏教的イメージの加担が必要であつた。鐘の聲の響きは、宗教的な救いを喚起するものとして、そのイメージを与えられているのではなく、かえつて他ならぬ仏教的なイメージであるが故に、一層人と人との関係のはかなさ、いのちの暗さ、空しさを呼び起すものとして物語に機能する。物語の仏教的イメージとは、そのようなものであつた。

#### 四

やがて物語が大君の死を迎えようとする時、総角の巻には次のような一文がくる。

豊明は今日ぞかし、と、京思ひやり給ふ。風いたう吹きて、雪の降るさまあわただしう荒れまどふ。都にはいとかうしもあらしかし、と、人やりならず心ぼそうて、疎くて止みぬべきにやと思ふ、契はつられけれど、恨むべうもあらず、なつかしうらうたげなる御もてなしを、唯しばしにても例になして、思ひつる事どもも語らはばや、と思ひ続けてながめ給ふ。光もなく暮れはてぬ。  
かきくもり日かげも見えぬ奥山に心をくらすところにもあるか

な

(総角 p 97)

豊明に用いる日かげの葛にちなみ、**日影**なる語が引き出されるという方法は、一つのかなりポピュラーな和歌的修辭と云つてしまえばそれまでだが、幻の巻に於て紫上追慕に明暮る光源氏の四季の中に、豊明節会の折、**みやび**とは豊明にいそぐ今日日影もしらで暮しつるかな(幻五 p 128)なる源氏の歌が置かれていることを私達は今思い起すことができる。豊明に用いられる日かげの葛から、**日影**なる語が呼び起され、逆に日の光も知らず悲しみに沈んでいるという心情が写されるといつた方法は、既に幻の巻に於て源氏をめぐつて使われていることを確認しておきたいのである。源氏にとつての紫上の意味を考える時、大君の死を迎えようとする薫の心情が、同様の方法によつて象られていることは、薫にとつての大君の意味を辿るべくきわめて暗示的である。

今そのことはさておき、総角の巻のこの場面は、宇治の自然の風にふぶく荒れに荒れた状況が薫をとりまき、それが豊明の節会というみのりの喜びをこめたことばと対置されることによつて、幻の巻よりも一層の心情の荒涼を物語ることになつていていることは注意せねばなるまい。なお続く、**光**もなく暮れはてぬとは、薫の心の根深い暗さを端的に現わす一文であると云えそうだ。

ところで、**光**なる語は、神話の時代から日本のアーキタイ

プの一つとして、卓越した美質を現わすのに用いられると様々説かれて<sup>註8</sup>いるのだが、「源氏物語」に於る光のイメージには、必ずしもその範疇に押えられないものがあるように思われる。自然現象としての「源氏物語」に於る光の用例を分類してみても、雪の**光**、螢の**光**、露の**光**、星の**光**、明け行く**光**などという風に強烈な輝かしさを持つた日や月の光などであるよりも、螢や星などのように微妙に点滅する場合や、明けゆく**光**など、薄明の場合が、物語には非常に多いことが指摘<sup>註9</sup>されている。「源氏物語」の**光**が、古代的な直観による美の類型では覆うことのできないものを持つていることはこうしたことから明らかである。

一方、たとえば大智度論の一条りが踏<sup>註10</sup>えられることによつて、**勾宮**が**阿難**が**光**に准<sup>註10</sup>らえられているといったことを考え合わせると、ここに光の仏教的なイメージが物語の中にとりこまれた可能性を窺うことは許されないだろうか。否、とりわけ観無量寿経などにまばゆくちりばめられた光の仏教的イメージを念頭におくことによつて、物語の読みとりは一つの方向性を示唆されないであろうか。**光**もなく暮れはてぬという一文の持つ、暗澹と荒涼の根深さを、そのような観点から探りたいと思う。

何故に、薫の心の荒涼が根深いのか。一つには、大君の拒否と、その死とが、薫の好意と誠実とを全く裏切るかたちで齟齬してい

く状況設定そのものの中で成就していくことが上げられる。「源氏物語」第一部、第二部、第三部には、各々「思ひなす」という語が、二四・十三・二七例用いられており、第三部のその使用頻度は比較的高いとみなければならぬが、このいわゆる大君物語の中でその言葉が果たしている役割はかなり重い。

へだてなき心ばかりはかよふともなれしそではかけじとぞおもふ

心あわただしく思ひみだれ給へる名残に、いとどなほなほしきをおぼしけるまま、と、待ち見給ふ人は、ただあはれにぞ、思ひなされ給ふ。

(総角内 p 57)

たとえば、右の例は、薫の策略により匂宮と中君との結婚が成つた後、その三日夜の衣料に添えて送られた薫の文に対する大君の返歌、「へだてなき……」を、薫は様々の状況に追いつめられた大君の拒否がより一層固められていくその現われとも知らず、ただあはれに「思ひなす」というのであつた。薫が、大君の孤絶した心情に関与することをどこまでも許されぬものであり、それ故に二人の関係は平行線を進むという状況の展開が、この「思ひなされ給ふ」に託されていると云える。

一方、大君の側に目を転じるならば、

……今はかぎりにこそあなれ、やむごとなき方に定まり給は

ぬほどの、なほざりの御すさびにかくまでおぼしけむを、さすがに中納言などの思はむ所をおぼして、言の葉のかぎり深きなりけり、と思ひなし給ふに、ともかくも人の御つらさは思ひ知られず、いとど身のおきどころなき心地してしをれ臥し給へり。

(総角内 p 85)

という具合に、匂宮と六の宮との結婚の噂から、大君は匂宮の心情をどこまでも不誠実なものとして、思ひなすことによつて、身のおきどころもなく悩ましさを募らせる。高貴な姫と結婚なさるまでの御慰みでしかなかつた、それでも薫の手前ことばだけが親切だつたのだと、大君の思ひは、その孤絶した心情の内部で自己増殖をくり返し、それと共に、死は進行する。

「思ひなす」という一語をとり上ることによつても、そういう大君物語の緻密に構築された虚しい齟齬の中の悲劇の増殖作用は明らかだ。根深い薫の絶望は、その辺りにも理由を問うことができる。

今一つは、薫にとつて、大君との恋だけが、道心との危い緊張関係の中で紡ぎ出され得る、その意味で密度の高い精神性を帯びた恋であつたということだ。これまで述べてきた、仏のみあかしゆらめく仏間を背景にした恋の場面、「鐘の聲」が朝を告げる恋の場面といったものは、すべて道心を付与された薫の、ただ一度

の恋としてのみその存在が可能であつた。そして、そういう緊張関係のただ中に、その恋が高められ、一方女房の側から死を賭しての拒否に出会うならば、結果は一つしかないはずだつた。遂にうち捨て給ひてば、世にしばしもとまるべきにもあらず。命もし限ありて留るべうとも、深き山にさすらへなむとす（総角内P 98）ゞ、死か出家かと、薫自らその結論を明かしている。

けれども、なお薫は、物語の主人公の一人としてその世界を導いていかねばならない。否、導き続けさせられた。その時、薫の道心と恋との緊張関係は奪われ、輝きを喪失した道心の下で、恋だけがめんめんと描き続けられることになる。（というよりも、描き続けられねばならない、と云うべきだろうか。）そして、他ならぬその恋が描き続けられる為の、その始発に位置したのが大君へのつきることない慕情であつた。大君の死を通して、薫にもたらされた深々とした喪失感、その意味で物語を終える為ではなく、始める為にこそ必要だつたのである。大君への恋と、大君の死とは、薫にとつてあらゆるものを包みこんでいた。その恋自体の高い精神と、そしてそのことからくる死に出会つた時の喪失感と。

薫にとつての大君は、源氏にとつての藤壺と同質のものではあり得ない。藤壺は、源氏の恋の原点にあつたが、源氏の恋はそこ

に発しながらも、新たなゆかりを育んでいく開かれた明るさを担つていた。若紫は、藤壺との二重写しの映像の中から、徐々に自身の生命を得、やがて六条院の中に紫上としてゆるぎなく存在した。その過程を支えるものは、光源氏の恋の開かれた力である。

源氏の恋は、藤壺に始まるが、そこに閉ざされ終わつていゝのは、あくまでない。一方、薫にとつての大君とは、原点であると同時に、帰点でもあるのだつた。薫の恋は、大君に始まり、大君に終わる。ここに、先に触れた豊明をめぐる薫の歌が、幻の巻の光源氏のそれに重なることの意味はあるのだ。今、詳述は避けるが、浮舟が、薫と結びついたかたちでのその像を成就し得ないのは、まさしく薫の側のそういう内的事情に、一つは起因するのだつた。

廻り道をくり返したが、大君の死を前にして示される、光もなく暮れはてぬゞとの一文は、その間のすべての事情を端的に暗示しているかのようである。齟齬に齟齬を重ねた状況の細密な構築は、暗い巨大な影を思わせる。その細密に組み立てられた悲劇的構造が、今、大君の死によつて幕を閉じようとする、まさしくそれは、光もなく暮れはてゆく、一つの物語の光景であつた。

一方、道心とのせめぎ合いの中で、一つの緊張を保持していた



薫の唯一の恋の対象が、今世を去ろうとしている。その緊張した  
關係故の精神性が失なわれる時、薫の道心は無慙なものと化するの  
ではあつた。

世の中をこと更に厭ひはなれねと、すすめ給ふ仏などの、い  
とかくいみじきものは思はせ給ふにやあらむ（総角内 p 99）と  
いう風に、当面する憂悲苦惱を仏の道心への勧めと受けとるとい  
う、光源氏的な宿世の了解<sup>註11</sup>——いはけなき程より、悲しく常な  
き世を思ひ知るべく、仏などのすすめ給ひける身を、心強く過し  
て、つひに來し方行く先も例あらじと覚ゆる悲しさを見つるかな、  
今はこの世にうしろめたきこと残らずなりぬ…（御法因 p 105）  
等の箇所に見られる——に一見するところ通うかのような薫の感  
懷も描かれてはいるけれども、それでいながら、現実には、三  
条の宮のおぼさむ事と、中君の御事の心苦しきとというしが  
らみの間に、この世に留ることにこそ、薫の場合意味がある。述  
べられたことは光源氏のそれに通うかと思え、否、通うが故に、  
現実に照されてのことばの響きの空しさは覆うことができないの  
だ。

まことに世の中を思ひ棄て果つるしるべならばおそろしげに  
憂きことの、悲しさも醒めぬべき節をだに見つけさせ給へ、  
と、仏を念じ給へど、いとど思ひのどめむ方なくのみあれ

ば、……

（総角内 p 100）

大君の美しい遺骸を前にする時、薫の思いは如何に無慙に受け  
身的であることか。これが、まことに世を棄て果つるしるべ  
であるなら、それによつて悲しさも醒まされるような恐ろしいこ  
とを見せてほしいと念じる。不淨觀の行使<sup>註12</sup>といわれる、無慙に受  
け身的な道心のあり方を描きこむことによつて、物語はなおその  
展開をはかろうとしている。

彼の思いは又、次のようにも述べられる。

恋ひわびて死ぬるくすりのゆかしきに雪の山にやあとを消な  
まし

半なる偈教へけむ鬼もがな、ことつけて身を投げむ、とおぼ  
すぞ、心きたなき聖心なりける  
（総角内 p 103）

雪の山にやあとを消なましと、半なる偈教へけむ鬼もが  
なとかいう表現には、例の薫の道心、宗教的志向が強くこめら  
れているようなのだが、結局、そうした表現により恋人の死故の  
身も世もない歎きが現わされているというところに、皮肉な構図  
はある。この時、そのいかにも宗教的な口ぶりは、それ故に、一  
層鮮やかに無慙に薫の心情の荒涼と、道心との乖離とを照らして  
くるものになる。

光もなく暮れはてぬとは、そういう薫と大君との特殊な

関係のあり方故の緊張——道心と恋とのせめぎ合い——、その精神の光輝が失なわれようとする状況を先取りする一文であった。光もなく、とは、単に、恋人の死にゆこうとする状況を暗示的に表現することではない。同時に失なわれようとする精神の光輝、道心の光輝をも意味するものに他ならない。一文のもつ、一種特有な絶望の色調は、実はそういうところからくるのであつた。「源氏物語」に於る光のイメージ、その最も複雑な意味深い使われ方は、この部分に極まつているということが許されよう。

註1 前者の立場に属する論としては、たとえば「薫の性格描写の解剖とその批判」(国語国文 大正14・10月、斎藤清衛)、「薫」(「源氏物語とその人々」所収・阿部秋生)、「源氏物語第三部の創造」(国語国文 S33・四月、小穴規矩子)、「源氏物語第三部主題把握への試論」(東京女子大日本文学 S44・三月、小沢富貴子)などがある。又、後者に於て代表的なものとしては「源氏物語第三部の世界とその構造」(「源氏物語の構造」所収 藤村潔)を上ることが出来る。

2 本文の引用は、すべて朝日古典全書による。  
3 伊藤博氏が、野分の巻に於る夕霧の視点の問題については既に述べられている。(『野分』の後—源氏物語第二部への胎動—文学 S42・八月)

4 「源氏物語宇治八宮の山荘—その間どり等について—」(梅花女子大学文学部紀要 S41・12月、増田繁夫)

5 石田讓二氏は、はかなしについて私見とは立場を異にするところで次のように述べておられる。おおよそ男が女に惹かれるその惹かれ方は埒もないものだというそのことがはかなしの一語に含まれ、その埒もない要素だけではない、より精神的な傾倒が薫

6 の場合にはあることが、却ってそう書くことによって暗示されているのである、と。(「大い君の死について」学苑33号)  
7 「薫創造」(清水好子「文学」S32・2月)  
8 吉岡氏の場合は、薫との決定的な一夜が大君に与えた傷の性質というものが大君の結婚拒否を固めるきっかけとして機能していると考えられている。(「薫論補遺」「源氏物語論」所収)  
9 「源氏物語のイメージリ」(小西甚一 解釈と鑑賞 S40・六月) ほか  
10 「源氏物語における呼名の象徴的意義—「光」「匂」「薫」について—」(赤羽淑 文芸研究28)  
11 いかげはせむ。昔の恋しき御形見には、この宮ばかりこそは。仏のかくれ給ひけむ御名残には、阿難が光枝ちけむを…… (紅梅P(四)157)  
12 「源氏物語の精神的基底」小野村洋子 二八七頁  
13 「源氏物語第三部の創造」前掲 (昭四五 日文卒 旧姓原岡)